
いつわって？カレカノ！

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつわって？カレカノ！

【Zコード】

Z0175BA

【作者名】

レオ

【あらすじ】

よくモテる圭吾と音々が偽り彼かのに？！

二人は幼馴染、おまけに音々なんて男勝りすぎてもう周囲は混乱？！

ドキドキバタバタツのラブコメディーつ！

* 第1話 *

「あ、あの・・・ボクと付き合ってくださいー。」
「・・・・・」

世の中、不吉なものだよな。

なんだつて、あたしは今一度も会話をした」と無い男子に告白なんてされてるんだろう・・・。

「あの・・・君、誰?」

「あーえと、僕は、2Aの本田と言つますー。」

「本田・・・君・・・(?)」

いや、まじで誰。

2Aつて・・・かなりの賢い方がいらっしゃるクラスだよな。
「・・・ごめん、知らないし興味ないし、なんか、ごめん
我ながら酷いとは思うけど、こういう振り方じゃないと
あきらめてくれないだろ。多分。

あたしはスタスタと自分の教室に戻る。
今は放課後。そしてあたしは日直。

ああ、だりい。んでもって・・・

「寒い!」

今月は冬まつさかさりの11月。

そして今は11月下旬。

はあ・・・はやく学校おわんねえかなー。

ここは公立森羅学園。

そここの2D生徒、井上音々(いのうえねね)。

成績は2Dの中では上のほうの人材。(それでもほほオール3)
所詮は2D。一番アホのクラスだから、しゃあないわな。

教室の前まで来ると、中から話声が聞こえた。

『あ・・・あの・・・圭吾君!』

『「ほんな放課後にどーした?』

圭吾? と・・・誰だ?

『わ、わたしと! 付き合つて、くれませんか?』

また可愛い声の子女の子だな。

多分2A? B? C? の女子だな。つか・・・2Dに女子いねえしな・

・・うん・・・。

『んーごめん、俺今そういうの興味ないんだわ。ごめんね』

『えと、じゃ、じゃあ! お友達・・・から・・・』

『「ごめん、俺お堅い女の子とはあわねえの。』

『え、でも・・・!』

『もういい? 俺、課題のこつてんだ』

『・・・圭吾君のバカ!』

そういう声とともにドアがいきなり開いて
その告白をしていた女子は去つていった。

あたしは教室に入つて、圭吾に声をかける。

「これまた酷い振り方だな」

「あれ。聞いてたのか?」

「まあね。あたしもさつき告白されたばっかりだから。』

「お前もまたなんだな。ど? 結果は?」

「もちろんふつたつーの」

「だーよなー。てか、お前の振りかたもどうせ大概だろ」

「まだましだる。『「ごめん、知らないし興味ないし、なんかごめん
つて言つて

帰つてきただけだから大丈夫だろ」

「いやいや、かなり酷いと思つ。俺ならなくぜ?』

「しらねえつての。はあ・・・告白なんてもつまつぴりりめんなん
だけどー。』

「だーよなー・・・あ、俺ーちょっとこいことおもこついた!』

「は？ なに？」

あたしは自分の席について、頼まれた資料閉じをはじめる。

「俺り、付き合おうぜー！」

「・・・はあ？」

「大丈夫。い・つ・わ・り！ の彼かのーだからわー！」

「・・・はあ・・・？」

「え、きにくわねえ？」

まあ・・・そりや氣に食わないけど・・・

だつて、幼馴染の圭吾とあたしが付き合つ（こつわりでも）とか

なんか、気がひけるんだよなー・・・

いやまあ・・・でも、適作かもしれないな・・・

「よし。のつた。これで断る口実ができるもんな

「よーつしー決定！ 俺らは偽り彼かのつ

「よんじーー！」

こんな感じでできた偽りカレカノのあたしたちの関係。

相手は幼馴染の森羅圭吾。しらいろけいご同じく2Dのアホ。

てか・・・

「ちょ・・・とにかくさむいんだけど・・・

「課題終わらせてさつとかえろうぜーー！」

「だなー・・・。つて、あたし課題じゃないしー！ お前だろ

「まあまあ。」

次の日。

あたしたちはいつもどうり一人で登校。

まあ・・・家が隣だから仕方が無い事だと思つ。

だつて、家から出るタイミングまでも一緒なんだよ・・・？

「ういーっす、おはー」

「おはよー。ふあ・・・眠い・・・んでもって寒い。」

「お前昨日から寒いばっかいってんじゃん。大丈夫かよ」

「まあ・・・大丈夫なんじゃね？多分ー」

「ま、ならいいけど。てか、その男口調いい加減直せば？」

「はあ？んなだること、なんでしなきやなんないの」

「いや、なんとなく。あー、なんでんなの好きになるのがいるんだか」

「うつさーい。圭吾だつてわっかんねーよ」

「まあな。おつ・・・と。俺らそういういえば恋人同士なんだつけ？」

「ああ・・・そういうえばそうだったな。普通にしてればいいよな？」

「んー・・・それじゃダメなんじゃね？」

「えー。じゃあどうすんの」

昨日まで幼馴染だつたやつとカレカノの振りでもしろつて言われて誰ができるんだ。そいつ今すぐ俳優に売れ、って話だよ。

「こひこひ感じじゃね？俺前付き合つてたときこんな感じだつた」
そういうと、圭吾はあたしの手を取つて指を絡めた。
ゆわる、手をつなぐと言つ恋人らしい行為。

「へえ・・・あたし付き合つたことないからわっかんねー」

「だよなー。所詮音々だもんな。所詮。」

「うつせー、ほら、学校近づいてきたぞ」

「恋人らしく・・・つて言つてもさらつとな、さらつと」

「別にいつも普通にしとけばいいんだろ？あたしは。」

「まあな。俺が誘導するから心配すんな」

「・・・信用はできねーけどまあ、信用してやるよ」

「うわ。かわいくねーの」

一 前からだつつの一

門をくぐり、教室に向かう。

さすがに周りの視線がかなり刺さる。

まあ、わざわざ来たの

「おお、園のことを、はやうてる男女が三つ、ないでないで人たる、

ちょいちょい聞こえる周りの声にあたしてヤツリヒト

「なによ、あこつ。圭吾君と手つなこじやつてー。」

「桂姫くんも圭姫君よー！昨日あたしを振つとこで・・・。」

ああ・・・昨日ふられた女子か。

こつちは野子の毒。

「……………」

「2Dの大事な女子なのになあ？！」

なにか大事な女子だよ。

「なあ、走つていい?」

「は？」

「あたし今すぐにでもこの状況から逃れたいんだけど。」

「ああ、まあ俺もそれは一緒だ。んじゃ、走るか！」

「どんだけものめずらしいんだよ。」
ダダダダダッと走っていくあたしたちを回りは呆然とみていた。

教室に入ると、いきなり男子たちに囲まれる。

「お前、どうも似合ってんだってー?」

「告白したのは音々とかー。」

「初キスはもうすんだとか！」

「なんだよーー。じゃあエモおわったのかあ？ー。」

「てかいつからつあつてんだけー。」

・・・・・。

どつからんな噂が回った。

誰だ。回したやつ。

いますぐぶつ飛ばす・・・

かなりブツチンきてると圭吾が耳元で

「切れるな。俺もかなり我慢してるので」

と言い、男子たちの話にあわせた。

「せうだよ、付き合ってんの。まあ幼馴染だしなあ？。」

「告白はどつねー。」

「残念ながら音々じやなくて俺だよ」

「初キスは？！したのか？！」

「まだだよ、あほか。昨日付き合ったの」

「じゃあエモまだ？」

「・・・てめえぶつ飛ばすぞ？」

ケラケラと笑いながら席に着く圭吾を見て

あたしはため息をつく。

ビーやつたらあんなけ氣楽に生きられんのか。
わつぱりわかんねえの。

頬杖ついてぼーっとしてると、不意に頭の上から声がした。

「ねえ、ほんとこ付を合つてるの？」

この声は・・・昨日の圭吾に告白してた女子か。

「ほんとだよ」

「じゃあ証拠みしり」

「はあ・・・？」

「付き合つてる同士なら、キス、できるでしょ？」

・・・この女、なにいってるつもり？

キス？圭吾と？

は・・・んなのありえないんだが・・・

「ねえ？圭吾君。」

うわ。わざとらしい。

「つ・・・・できるにきまつてんじやん？」

一瞬つまつたものの、圭吾は普通に答えた。

いや・・・できないだろ。

つか・・・あたしその場合ファーストキスは圭吾ですか？

「じゃあ、いまやつてよ。」

「わあつたよ」

圭吾はかつたるそうにこりつけられて

あたしの耳元でささやいた。

「ファーストキスいだきます？」

うわ・・・腹立つ・・・

てか・・・いつわりの恋人なのに

ここまでしないといけないんだ・・・？

そんなこと思つてると、田の前に圭吾の顔がきて

唇に体温を感じた。

ファーストキス・・・ね・・・・。

圭吾はきっとファーストキスなんかじゃないんだろうけど。

ま・・・所詮あたしだしな。

いつのまにかキスは終わっていて

周りの男子は唖然としていて

もちろんいいだしつべの女子も唖然としていた。

「ほんとに・・・したの・・・・・」

「やれつつたのだれ」

「・・・圭吾君のバカ！」

その女子は教室を出て走り去つていった。

「・・・おれ一日連続でバカつていわれたんだけど。」

「まあ、所詮圭吾だししゃあないだろ」

「なつ・・・しつけいな。」

「あ~り~めんあそばせ、本音がでてしまったわ

「きむちわりい」

「・・・・・」

正直今のあたしに女口調てのはわづかんね。

でもいつか、女口調になつてみたいかも・・・。

「どうした?」

「こ~や、なんでもねえよ

* 第3話 *

時間は淡々とすぎて、もう4時限目。

4時限目はあたしの大嫌いな英語。

基礎の英語は覚えてるもの

ほかの英語なんてなにがなんだかわっぱりなんだよ。

「ふア・・・眠い・・・」

ちらりと圭吾を見ると、すでに爆睡・・・。

いや、はやすぎんだる、あいつ。

ああ・・・でもあいつ3時限目の数学から寝てたっけ?
まあどーでもいいんだけど。

英語の先生はかなりお人よしで

寝てるやつがいようと、落書きしてるやつがいようと
起こさない。お人よし・・・つづーか弱い?

「えーっと、じゅあ、これを訳してもらうのは・・・
音々ちゃん! お願いします」

「えーっと・・・わかりません、すみません。」

「あらあら、いいのよ。これはね——」

この人はどこまでお人よしなのだろうか。

少しごらい怒ればいいのに。

そんなことを考へてる間に
チヤームはなり、昼休み。

「圭吾、学食の特製たつぱりイチゴパン売り切れんぞ?」

「ん・・・は! やべええつ! ! ! !」

全速力で教室を駆け抜け、圭吾は売店に向かつ。

はあ・・・あたしも今日は弁当ないんだよな・・・

「だり・・・つかさみ・・・」

ト「トトト」と旅店に向かおつと廊下を歩き出しだった。

「ねえ？あなたがお井上音々？」

田の端にあられたのは、ソレモビココブリしたやつはこなつであらへ
変質者……じゃなくて、ブリブリした女子がだつていて。

「はあ……。あたしが井上音々ですが、なにか？」

「あなたあ、圭吾くわんとおつかれあつてんじゆんじゆつてえ？」

・・・んだよ、あたしのあいつをつかむかよ。

だりこ。ひつじつこ。

「わうだカズ。」

「ふう～んう～～～。じおせえ、あなたがあむつやつこやつたんで
しょお～？」

「は・・・？」

「そおんなんだつたらあわたくしにこにこ～」くわんをあくすつても
らえなあこ？」

・・・コズル？・ゆする？・譲る？・謙？

「ゆするつて・・・なにが？」

「だあかあらあ～圭吾くわんをああたしにこくわおだあこつて！」

「いやだから・・・」

あたしが言おうとしたとき、不意に後ろから声がして
がばつと抱きつかれた。

「てめえみたいなんに誰がいくかよ。ばつかじやねえ？」

「？！」

圭吾だ。後ろから抱き着いてくれのせよへあるカズ
さすがヒヒのタイミングばびくわつした。

「圭吾くわん」

「きもい、りかよんな、ブス」

「なつあ・・・～」そ、そんな」とお皿ひらここここここおわつひるの
お？

「うん、余裕で思つてゐるけだ」

「ふう〜ん、まあ？あたしはわあ、この学校にいられないことをおもつておくのねえ」
「へ？なんで？え、もしかしてお前のおかんが権力持つてるとか言つ

ど？でもいい？口実？え？だつたらかなり無駄だよな。」

「な、なあんですうつてえ？」

「だつて、俺、理事長の息子だし。」

「はつ・・・・！」

今氣づいたのか、この女子。

そう、圭吾はこの森羅学園の理事長、森羅初世の息子。

まあ、＝だな。圭吾はかなりの権力者つてわけだ。

時期理事長つてわけじやないらしいけど。（圭吾の頭じや理事長なんてつとまんねえしな）

「じゃ、じゃあわたくしはこれで・・・」

「ブス、これで終わると思つた。」

「ひつ・・・・！」

そのブリブリ女子はものすゞいスピードで去つていった。

「モテる男はつらいな」

「・・・お前も氣をつけるよ」

「は？なにを？」

「なんでも。とにかく氣をつける」

はあ・・・？

なにを氣をつけると？

まあ・・・圭吾が言うんだし・・・

「ん・・・」解

* 第4話 *

「やべ・・・。商店いきそびれた・・・」
変なブリブリ女子に引き止められたせいで
商店はいきそびれてしまった。

外のコンビニでもいくかあ・・・？」

「ん、これ。」

そんな短い言葉とともに

圭吾が隣からマヨパンを差し出してきた。

「え？ いいのか？」

「音々のために買つてきたんだし」

「ラツキーッ！ 圭吾まじ好きだあ～」

そんな恋愛感情なんてものは1滴も混ざってないけど
周囲からはひやかしの声がした。

「ラブラブだね～」

「さすが幼馴染～！」

「くう・・・！ 圭吾にぬかされるとほなあ

・・・・。

なにがラブラブだ。

さすが幼馴染つて・・・

なぜさすがなのか？

そんなことを思つていると、ポケットで
ケータイが震えた。メールだ。

件名：津田です。

本文：放課後体育館裏に来てください。
大事な用があります。

はあ・・・また告白かなにか？

ま、断る口実はあるわけだし……

てか、なんだか響広がって、よく畠山なんてできるな?

どうした?

「また告白の場所掲示メール」

卷之三

ハシテ

一
・
・
・
行くな

「は？ なんで？」

「...うん...」
「...」

開拓地あたしの贋體は正確である

？」

放課後、体育館裏にあたしは行つた。

「呼び出しが一回になーとか・・・

あつえねえこもせびがあるんだけど。

そんなことを思つてると、不意に後ろか人の気配をかんじた。

さつきまで前を向いていた方向から人の声がした。

「音々さん、来てくれたんですね」

それを聞くとそこにはかなり長身の男子が立っていた

「呼び出されたしな」

約束は守るのがあたしのルール。

「おれ、べつに音々さんをだましたいわけじゃないです」

「は？」

いきなりわけのわからないことを言われて

おもわず思つてることを口に出してしまつた。

と、いつも「は」だけだけど。

「けど・・・圭吾さんと付き合つてしまつていた以上

俺にはもうこんな方法しかないんです」

「いや・・・だから、なに・・・?!

最後までは言わせてもらえず

後ろから誰かに口を押さえられ

あたしのまぶたは重くなり

閉じたくもないまぶたを、閉じてしまった。

「ん・・・・・」

目を開けると、そこは何処かの倉庫らしきところだった。
そういえばあたし眠らされたんだっけか。

はあ・・・めんどくせー・・・

今の状態は最悪だ。

口もテープで閉じられてるし

手も手錠をかけられていて

足もロープで縛られている。

とりあえずあたしは、周りを見て

この手錠を解けそうなものをさがした。

ねじでも針金でもなにかあれば解けんだけど・・・

端っここのほうにねじがコロンと落ちていた。
ちっこいけど・・・まあ、だいじょうぶか。

カチカチカチと手錠の鍵の差込のところを探る。

カチッ

「んー・・・・ん・・・・(よー・・・・し)」

手錠が解けてあたしは、テープとロープをそわぐれと外した。
と、同時に倉庫のドアが開く。

「あれ・・・といちやつたんですか?」

「ああ。あれ、息苦しくてな。ＳＭプレイにはひときつつかせんじやね?」

「そうですか、すみません。でも、もう一度あの状態になつてもいい

います」

「は? いやにあまつてんじやん

「無理です。・・・圭吾が来るまで、無理ですよ
「ヤリと笑う」ことになにか違和感を感じた。

あ・・・

「お前、もしかしてあの、えつとー・・・圭吾に告白した女子の一・
・・」

「そう、元彼だよ。圭吾は俺の憎き相手。音々さんと付き合っている
なら

愛する彼女を助けにこないわけないでしょ?だから、そこを
ビリビリッとやるわけです」

・・・バカだ、こいつ。

圭吾がそんな単純にやられるわけもないし

第一、あたしたちは偽りのカレカノ。

助けにくるはずもない。所詮、幼馴染だ。大好きな、友人、親友だ。
「てか・・・圭吾なんていらなくともあんたぐらいなら
あたし一人で十分だけど?」

あたしは手をポキッとならせる。

「さすがに、先輩だからと黙つて負けませんよ。女なんかに」

「あたしを女だと思ってる時点でお前の負けだ。」

その言葉の終わりと同時にあたしはそいつの溝に思いつきり蹴りを
いれる。

その足をつかまれるもの、思いつきつ振り払い、一回宙返り地面
に着地した。

「つ・・・」

あたしはすぐにしゃがみこむそいつの上に行き、足を上げる。

「いい?頭に、一発入れても?」

「・・・入れてみる。入れればいいじゃねえか!」

「と・・・。ごめんだけ?、あたし後輩をいじめる趣味はねーの
足を下ろして、あたしもしゃがみこむ。

「あたしのケータイ、どこ?」

「・・・はい。」

そいつは自分のポケットからあたしの黒のケータイを取り出す。それを受け取つてあたしはただちに圭吾に電話をかけた。

『もしもーし？ 音々、どうした？』

「ちょっとあんたに用があるかわいい後輩がいんだけど今これる？えつとーーには、〇〇工場近くの第2倉庫だと思つんだけど

『ん、わかつた。んじゅ』

「じゃね」

チチ

「音々さん・・・何してるんですか・・・？」

「圭吾よんだだけだけど？」

「は！？ な、なんでんなこと！」

「あんた、圭吾の話たかつたんだろ」

「・・・・・ そうですけど。それ、俺にしか利益なくないですか？」

もしかしたら殴り合いの喧嘩になりますよ？」

「大丈夫。殴り合いの喧嘩はぜつてえあんたが負けるから。」

「・・・・・」

5分ぐらいして、圭吾が倉庫に「しつつれーい」と言つて入つてき
た。

どこまでもお氣楽なやつだ。ほんとに。

「んで？ 俺と話したいやつって？」

「そこにいるやつ」

「あれ、津田じゅん」

「どーも・・・圭吾先輩・・・」

「え、なに？ 俺に用つて？」

「・・・なんで、真知子振つたんだよ・・・」

「へ？」

なんつーすつとんきょうな声だ。

「なんでつてきいてんだよつ！」

津田つてやつが放つたこぶしを圭吾は普通に片手で止めた。
そして、そのこぶしをつかんで思いつきり投げとばす。

「いつてつ・・・」

「真知子つてやつ、お前のかのじやねえの?」

「・・・もとかのです・・・」

「おれ、あいつがよく図書室にいんのしつてたけど
ずっと窓からサッカー部の試合のぞいてほほえましあうにしてたっ
ての」

「・・・そう・・・なの・・・か?い、いや、でも、それは俺を見
てるんじゃなくて・・・」

「あんたをみてたんだよ、多分。だって、圭吾は今足壊してて試合
には出でない」

「・・・・・。わけ・・・・わかんね・・・!」

「まあ、もういちど真知一こ?だつ?つて人に気持ちつたえるん
だな」

「俺にほれたのは多分なにか八つ当たり的な感じだったんじゃね?」

「そんじや。いちいち拉致していただきありがとうございました」

あたしはたつたかとたからかに倉庫を出て行つた。

一 ちよ、音々一までってー。

「はあ～いいことしたなあ

「いや、そりゃいい」とはしたけど拉致って？！おい！

「さーてどー帰つたら何すつかなー」

「おー!!人の話聞ナつて!!

いやがにいがくに持到てがんがん

その限りが至
抵到しれかん

その津田……とにかく、のか来て

んでまあ、かくかくしがじか

「だから俺はいくなーって言つたのに

あれ、そういういみだつたわけ？

」・・・」

「あー……それは、その……。うん、ごめん

「ぐつぐついいけどな。終わりよければすべてよし。」

音々が無事なら全然いいから

「うそ、おまえの言ふとおりだ。」

— १०३ —

「……僕は……」

かくしてかかはるに、かくしてかかはるに、かくしてかかはるに、

體は頭上で雨帽帽立の世で一番のノカたな上

- 1 -

知らない間に家に付いていた。

「それじゃ、またあしたー偽りの（笑）ダーリン（笑）」

「おまつ・・・笑いすぎだろ！」

「だーつておもしろいんだもん」

そんなことを言いながら、あたしは家に入った。

そんなことを言いながら、あたしは家に入つた。

「ただいまー」

「あら、おかえり。おそかつたわね?」

「うんー圭吾と遊んでたー」

「いつまでも仲がいいわね」

「まあなー。あれ、るかは?」

「ああ、なんか上でせがしものしてるわよ」

「はあ・・・?」

井上るか、中学3年生のあたしの弟だ。
るかは年下の癖にあたしより背が高い。
頭一個分ぐらいはな・・・。

2階にいて、るかの部屋をのぞくと
えぐいことに、部屋が空き巣にはいられたかのよう
くつちやくちやだつた。

「るか、お前なにがしたかつたんだ・・・?」
ベットに丸まつて壁の方向を向いてるかをつつきながら
問い合わせるもの、ぐすんといつまあと泣いてるであろう声っしか聞
こえない。

「るーかー。」

「・・・姉ちゃんにもらつたキーholderなくした・・・」

「は。?」

キーholder?

ああ・・・確かになんかのイベントで小さい頃に
るかに作ったキーholderか・・・
「どこせがしてもない・・・」
「はあ・・・そんなことでめそめそするな。
ほら、あたしもさがすから」

「うん・・・」

「い・・・いや・・・宿題を・・・
「とりあえず入れつて。風邪引くぞ」
あたしは圭吾を中に促すと
タオルケットを肩からかぶせた。
「んで?宿題が?なに?」
「・・・教えて・・・」
「・・・そんなことでベランダに?」
「うん・・・20分ぐらい・・・」
「はあ・・・。ほんとバカだな。ほら、一緒にやるぞ」
圭吾はぱっと笑顔になつて
机にノートを広げた。

* 第7話 *

「これ……なに?」

圭吾は根っからのバカだ。

でも、あたしはそんな圭吾が好きだ。

今……友達としてだけだ。

「わっわいったじやん。」これは一問田と一緒に公戻

「はあ……！……。Xの数字どれ?」

「25だよ。ほひ、1問田と並んでると一緒にだ」

「うわ、本当だ。」

「いやそんな面倒くさい事で嘘いわないからな

「だよなー」とよ、答えた――――――

圭吾は幼馴染で〇歳の頃からずっと一緒に
おまけにクラスも全部一緒に
なにからなにまで一緒にいた。
けど、あたし達は唯一違つていたのがあった。

「音々ーとけ……た、ぞ?」

その時あたしはきっと、

壁に貼つてある写真を見て

ボーッとしてたのだった。

「……音々、あの事、まだ気にしてんのか?」

「……あたりまえだろ……。あたしのせいなんだから」

「俺もうなんともないし、音々に悲しんでほしつもりもないんだ
けどや……」

大怪我をしたかしてないか、だ。
圭吾はかなりの大怪我をした。
それも、あたしのせいだ。

中学に入りたてのあたしと圭吾は調子にのつて
いつもチャカチャカしていた。
そんな時外に出たのが運の尽き。
あたしも圭吾も事故にあった。

「ん・・・。ごめんな。あたしあつたかいお茶でも持つてくる」
スッと立ち、部屋から出て行く。

少しいたまれなかつた。

あの記憶が脳内を巡つていた。

「お母さん、あつたかいお茶、ある?」

「あら、どうしたの?」

「ああ圭吾がきてんだ。宿題教えてくれつて」

「やうなの?じゃあおまんじゅうももつて行きなさい?」

そういうえばもうすぐ期末テストじゃない。勉強、がんばりなさいよ
?」

「姉ちゃん、ファイト!」

「そうか・・・もうすぐ期末かー・・・

「ん・・・ありがと」

階段を上がつて突き当たりがあたしの部屋。
部屋はかなりシンプルだと自分で思つ。

「はい、あつたかいお茶。」

「あざーっす」

「はあ。もうすぐ期末だな」

「ズルズル——(お茶すすつてます)ん・・・だな」

あれ。圭吾、いつもならあわてるのに。」

「あわてないのか?」

「ん？んー・・・キマツ？きまつ？期末・・・期末テスト？！」

「あ、ああ・・・？それ以外にはないと思つだが・・・」

「なあああにいい！？や、やばいよー俺！古典とかもう全然だよ

！？

英語も数学も無理無理無理ーっしぃ

「・・・はあ。部屋もどつて全部の教科もつてーい。教えてやるか

ら。」

「まじで？！やつた！」

「ただし。英語はるかに教えてもらつて」

「・・・るかあ！？」

「うん。」

「スバルタキヨウシ・・・」

「いいから、とつてーい」

「へいへーい・・・」

圭吾は渋々あたしの部屋のベランダから自分の部屋のベランダにわ
たつて

部屋に入つていつた。

あたしはるかを呼びに行く。

「るかー。圭吾が英語教えてほしいんだつて

「わかつたー今行くー！」

るかはかなり賢い。

英語なんてあたしより断然できる。

戻ってきた圭吾を部屋に促し

座らせる。

あ、言い忘れてたけどるかはかなりのスバルタ。

「それじゃ圭吾君、いいですか？この英語はですね

「音ターカコワイー・・・」

「我慢しろ。あたしも聞いてるから」

卷之二

「圭吾君、聞いてるんですか？」

「へ？！あ、はい！」

主君はるかの前ではずっと敬語。

るかは吉吾に敬語を使う。

あれ
・
・
・
けいこはかたな
・
・
・
・

「姉ちゃん聞いてる?

「ああ、うん。聞いてるよ。続きよひしへ」

卷之二

・・・・・1時間は経つ ただろうか。

それでもまだ、るか先生の英語スパルタ授業は続く。
あたしは、途中で違う勉強だの

読書だのとしているからあんまり害はないが
圭吾はもう半分死んでる状態だ。

まあ、やむを得ない状態・・・ってのがほんとの正解ってことかな。

「音々・・・俺、もう無理・・・」

「まあ、よくがんばったな。るか、ストップ。」

「あ、・・・俺、またとばしてた?」

「いつもと同じぐらいだから安心しろ」

「いや・・・そのいつもがとばしてるから安心できない・・・」

「まあ大丈夫。所詮圭吾だから、相手は。あ、ほら、もう8時回つ
てるし

そろそろいじ飯できるだろ。あたし達も後で行くから、先、いって
こい」

「わかった。それじゃテスト勉がんばって。」

そういうふうとかはしたへ下りていった。

圭吾はすぐ床に倒れこみ

半分目が死んでいた。

「圭吾ー。大丈夫かあ?」

「全然大丈夫じゃない。むしろ大怪我」

「頭のだろ。」

「精神的にだ。」

「それはあんたの頭がついてつてないだけ。ま、あたしも人のこと
言えないけどな」

「ああー・・・やべえ・・・もう俺眠たすぎて立つてらんねえ。」

「いや、いまのところお世話を立てる様子はないけどな。」

「くそー……眠いー……」

「もう・・・ほんとお前まだガキだな。

お母さんやおはなしをおねむ
ほんとお前また力キたた
せう・・・ほんとお前また力キたた
の時間で中ねー

ばぶばぶうへ

「おまつー俺を馬鹿にしてんのかつ」

うん(・)(・)

いや、うん！しかも言葉の跡に顔文字付いてたの俺目撃した

けど！？

「氣のせいた。ほら、あたしのベッドに寝とけ。氣が向いたらど

かのタインソンで起きてやが

父が向かなければ元通りの眠りは作れぬ——お休み——

「さあ、おまえが殺人を告かないと、

ノ文夫が死んでゐる間に死ねが死んでゐる

「河」段「氣」

「ナリナリのアリバトの御心地悪くない？」

「兩國關係」，「兩國關係」，「兩國關係」。

卷之三

トトコーばかりのモードを露つむ。

ま・・・るかのあの機関銃的授業聞いてれば眠たくもなるわな。

あたしは挂畠が寝てこる間にいじ飯とお風呂を済ませる。

まあ・・・全部が全部5分程度でおわるか

リビングでねーのーにシャの相手をして へーえはあかうた
あこーの部屋で行くよ、圭吾はーまだ二歳中。

あがしの部屋は行くと
三番はいなかは焼睡口

そろそろ去る、起こしたほうがいいか?

「圭吾ー。もう少しひま回ったけどー？」

「んー……」

起きる気配なし。

まあ……ここは寝させておいてもなんら問題はないわけだ。
あたしは一旦リビングに行つて、お母さんと事情を語り合
いつもと同じように

「あー、わー。じゃあ、音々は座敷の押入れにある布団、部屋に持
つていきなさい。」

美智ちゃんにはあたしが連絡いれとくわ

「んー。ありがと。そんじゃ、もってくわ

こんな会話がたつた。

多分、いや絶対に普通ならば高校生の男女が同じ部屋で寝るなんて
ありえるわけがない。けれど、これもまあ、あたし達の間では
余裕でありえてしまうわけだ。恐るべし幼馴染つて感じだ。

ベットのした横あたりに布団を敷き、田舎ましをかける。
あたしは遅刻しない主義。これでもまだ20では優等生。
まだ21時だけど、小さい頃からもあたしもこの時間に寝てる
から

今となつてはこの時間に寝くなるのが普通になつている。
圭吾が夜、起きたときのために、一応紙を置いておく。

けいじく

気が向いて起こしてやつたけど起きなかつたん
自分でいえんのねむりについたんだなとおもい
次は起こしませんでしたー。

サービス。

てことで、かなりまよなかに起きたようだつたら
そのままねていいから。

そんじや おやすみー ～ ～

ねねよ
り

こんなことを書いて。

あたしも布団に入り、一応声をかけておく。
「おやすみー・・・おやすー・・・」

* 第9話 *

「ん・・・」
カーテンから朝の光が差し込んでいるのに気が付き
あたしは起きる。ベットを見ると、圭吾はまだ寝ていた。
一回起きたかどうかはしらないけど、とりあえず
ぐっすり眠っている。

本当に永遠の眠りについてたりして。

時計を見ると7時前。

目覚ましは7時になるから、意味はなかつたらしい。
目覚ましをオフにて、布団から出る。

今は冬。布団が恋しい。

朝の気温は肌にぴりぴりときていた。

「さみ・・・」

クローゼットから制服を取り出して着替える。
圭吾は寝てるわけだ、別にここで着替えるても
大丈夫だろ、そう思つてあたしは制服に着替える。

森羅学園の制服は女子にはかなりの人気があるらしい。

あたしはあまり興味ないけど、かわいらしい。
ま・・・あたしはいつも適当に着てるんだけどな。

制服に着替えて、圭吾の部屋に行つて圭吾の制服を取り部屋に戻る。
学校にもつていぐものは全部そろえて部屋に戻る。
外の冷気は怖いほど冷えていて、地球温暖化とかいつてるへせにと
思いながら部屋に戻つた。

ベットで寝ている圭吾を起します。

圭吾はパクパクと朝食を頬張り
あつというまに食べる。

・・・はえ・・・・
「食器洗つてくるわ
「いいよ、おいといて。
「ん、サンキュー」

* 第10話 *

AM 8:00

「そろそろでるかあ」

「おひ」

あたしと圭吾はいつもながら
ほぼ同時に靴をはき
ほぼ同時に玄関をでる。

「音々、ネクタイしまつてないじやん」

「え？ ああ、別にいいんだよ。」

あたしはほかの女子とはちがつて
いつもネクタイをしている。

リボンはなにかこつ恥ずかしくつてさ・・・
「そういうえばカッターシャツのボタンを止まつてないし」
「別にいいだろ。3段までだし」

「ま・・・いいんだけどな」

圭吾があたしの身だしなみについて
何か言うのはいつものことで。

まあ・・・圭吾も人の事言えた身じゃないんだけどな。

「あー・・・ねむ・・・」

「眠いよつさむい・・・」

そんな同でもいっことを言つてると

学園に着く。あたしの家からおよそ5分程度の場所。

「んじや、りしくいくか

「そうだな」

あたしたちはカレカノとしてこの学園にいる。

でも、それは偽り。偽の彼氏と彼女。

危ない事もあるけれど、これが告白を断る口実にもなり意外と楽なのかもしない。

学園の門をくぐると、あたしたちは手を繋ぎ力レカノ風に自分たちを仕立て上げる。なんか結構酷い言い方だけどな・・・。

「相変わらず皆の注目の的だな」

「つか男子の視線が痛い。」

「あたしも女子の視線が痛い。」

二人で顔を見合させてクスクスと笑う。

あたし達が仲いいのは小さい頃からだけど

こここの学園にはあたしたちと幼馴染の人はいなくて

1人を除いては違う高校に行つてしまつた。

理由は・・・

実はあたし達が行つてた中学は中高一貫だつたんだけど・・・

その中学は結構遠くて、事故にあつた圭吾には不便で・・・。

怪我は大怪我といつても右足骨折だつたんだけど

全治3年とこれまた酷く折れたのだ。

だから、中学よりも近いこつちの学園を選んだわけで

あたしは圭吾と離れたくなくてこつちの学園にきたわけだ。

朝のHRが始まる。

2Dの担任小倉透真先生、通称おーちゃんは
えらいニコニコしながら教室に入つてきた。

「皆おはよー」

「おはよー。先生」なんかキモイよー

「いや朝來ていきなりキモイはないだろ」

「だつて朝からニコニコしてるからさ」

圭吾がおーちゃんの異変に突つ込んでいた。

皆それを笑いながら聞く。いつもの事。

「みんなにいいお知らせがある」

「おーちゃんが結婚するとか?」

「おまつ・・・！俺を泣かせる気が！」

おーちゃんはいまだに独り身男性。ちなみ年齢は33歳。
結構イケメンだとあたしは思うけどモテないらしい。

「独り身はつらいね～」

「ちょ、てめだまれつ！今日までは前らでとつて
すごーくいいお知らせだぞー！」

「なになにー？」

「クリスマスの日、みんなで旅行にいけることになつた！

もちろんほかのクラスと一緒にだがな」

先生の突拍子もないこと話に

皆唖然としていた。

「それ、ほんと？」

一人の男子がキヨトンとしながら聞いた。

ああ、本當が上場所は東京だ。三浦

「東京？！すつづえええつつつ！ー！」

男子が声を挙げた。

あたしも内心かなり興奮した

『おつしやああああああああ

このおっしゃあはまあ・・・多分

数学なくなくたのおりしゃり

「うれしつく」

「はいはい・・・」

学年はあたし

なせなら」のクラスで女子はあたし一人だけなわけで、ほかの女子はお堅い頭をしてらつしゃるらしいんだけど、あたしはどうもバカなもんで。

「そんじゃ、東京の班決めすんぞー。えーつひとびつ決めればいい？」

「とりあえず好きな奴と・・・」
「一わ一わ!!・・・」

ワアワアワアと野子たち
レギレギ!!・・・・・

高校生にもなってここまでワーキングするか、普通。

「意見があるなら挙手」

「拳手つて何?」

「てめえ殺されたいのか」

「すんません。」

「んで、意見ある?」

班は好きな人同士といふことになり
5人組みで班をつくることにして。

さあて、あたしはどことなるうか・・・

「とりあえず・・・圭吾ー」

「やつぱ音々とだな」

「あ・・・圭吾、出ても大丈夫なのか?」

「ああ、もう大丈夫。昨日もいつたろ?」

「なら・・・いいけど・・・」

圭吾が事故にあつてから

あたしは圭吾が郊外に出るのを怖がつていた。
また事故にあつてほしくない、それだけで
怖いなんてあたしこそお子ちゃまだよな・・・。

「ほか、誰にする?」

「んー・・・害のなさそうな裕真とか英斗とかでいいんじやね?」

「だなー。たーちゃんーえいこー」

「ん? なに?」

「いい加減えいこーつて呼ぶなよ」

「ごめんごめん。お前ら誰かとなつた?」

「なつてないよ。俺ら二人だけ」

「んじや俺らとなろうぜ」

「ん、OK」

「ういーつす」

コレで4人。

滝口裕真、通称たーちゃんと
田口英斗、通称えいこーは

このクラスでもそこまで目立つた存在でもなく

それであたし達とは仲のいい存在だった。

まあこのクラス全体的に仲いいんだけど。

「あと一人、どうすんだ?」

「んー・・・あたしは誰でもいいよ

「えいこー誰がいい?」

「んー・・・りょーとかでいいんじゃね?」

「のこつてつか?」

「のこつてんだろ。りょー、のこつてるかあ?」

「ふああ・・・なに・・・?」

眠そうな顔でこっちに来るのは

瀬戸涼汰、通称りょー。

圭吾みたいにアホじやないけどクラスにいて
でも毎日居眠りしてる、世間一般的にはよくわからん奴。

まあ唯一あたし達の仲を知ってる奴。

さつき言つてた一人を除いての一人。

幼馴染つてわけじやないけど小学生の頃に知り合つて
圭吾が事故に遭つた事も知つてる奴なのだ。

「班、りょー決まった?」

「別に」

「んじやなるーぜ」

「けい、お前もう大丈夫なのか?」

りょーも一緒の心配をしていた。

知つてれば誰でも心配する事だけどな・・・

「さつき音々にも言つてたけど大丈夫だよ。」

「そう、ならいいけど。」

「おし、じゃありょーも班な。はいけつてえい!

音々黒板に書いてきてー」

「自分で行けよ」

「どーせ前にいくだろ?」

いたずらに笑つて圭吾は自分の席に戻つていく。

その笑顔にドキッとしたのは・・・あたし。

「つ・・・

「音々？」

「あ、いや、なんでもない」

「そつ？ああほら、もう決まってる奴でてきたぞ」

「あ、おい！勝手に黒板に書くな！アホ！」

勝手に黒板に班を書く男子をあたしは止めて
一班ずつ聞いていった。

クラスは20人。班は全部で4班。

さて、次は部屋割り。

まあ・・・部屋割りなんてどうでもいいんだけどね。

「おーちゃん、部屋割りの紙は？」

「ああ、これこれ。あ、そつそつ。」の部屋割りで行くとつてか
どの部屋割りで言つても音々は男子と同じ部屋になるんだが・・・
「別にいいんですけど。」

何か、問題でも？

「え？！いいのか！？」

「別に・・・え？なにか都合悪いのか？」

「あ・・・いや・・・」

おーちゃんの戸惑いをあたしは無視して

部屋割りを見た。一クラス部屋は2部屋。

どのクラスも20人ちよいとかしかないからな。

「んじゅー・・・部屋割り、自分たちで決めたいか？」

『べつに一ひとつちでもー』

「んじゅー・・・」

「いいやつーお前らーちょっとまでー」

あたしの言葉をさえぎって一人の男子が割り込んできた。

「んだよ、変人」

「なつ！俺は変人じゃなくてルー様だ！」

「だまれ、変人変態オオカミ。滅びれ」

そういうと変人はにこつと笑つて

「男は皆オオカミさ」

とかいつて前に出てきた。

「ちょ。部屋割り・・・」

「それに対しても意見だ！お前ら！わかつてゐるのか！
このクラスは！女子が！一人しかいないんだぞ！
てことは！だ！わかる！だろ！？」

『ー・・・え？』

見事にそろつた。

る一意外見事にそろつたな。

あ、ちなみに一つてのは

このクラスで一番の変人変態の
一之瀬瑠歌いちのせるか

これ以上の説明は無なんで略な。

「いや、え？じゃなくて。男はみんなオオカミなんだぜ？
ほら、みろ！ここに口は悪いが美少女がいるじゃないか！
この女子と一緒になりたいとは思わないのかー！」

『ああ・・・・・ああ・・・・・？』

話かみ合つてないよな。てか・・・

「誰が美少女なんだよ」

『音々しかいねえだる。このクラスじゃ』

あまりにもそろつ声たちにあたしはドン引き。

「はあ・・・・？お前らの曰 大丈夫？」

「まあお前が理解してなくとも別にいいんだ。
どうだ！みんな！「レで意見は変わつただろ？！」

『なにが変わるんだよ』

そりやそうだよ。なにがかかるんだよ。

「正味やー・・・・・」

・・・え・・・・・・?

あたしは圭吾の何気ない言葉に
あたしの胸になにかが刺さる。

「正味やー、音々を女として見る奴がいないんじゃね?」

『女として見る奴がいないんじゃね?』・・・・。

なんだろうか、この胸の痛みは。

あたし、なにか病気持つてたのかな。

あれ・・・・・

「おい? 音々?」

「あ・・・・なに?」

「部屋割りのことだけど!」

「あ・・・・・じやあ・・・・・1・2班と3・4班で・・・・・いじつかな・・・」

「結局俺は無視か」

とかなんとか言いながら戻つていくるーの声にも反応できず
ただただあたしの胸は痛みを感じて
どうしてか聞きたくても
聞く相手は、いなくて・・・

「おい、音々? お前調子悪いのか?」

おーちゃんの声に反応してあたしは我に返る。

「あ、いや・・・・・」

「でも顔色悪いぞ? 無理せず保健室いってこい。ほら、誰かつれて
つてやれ」

「あー、俺い・・・・・」

「俺行くよ。」

そう言つたのは、圭吾ではなく、りょーだった。
少し好都合だと思つ自分が

なにかわらない、といふか……わかりたくない。

廊下出て少し歩いたところでりょーはあたしに話しかけてきた。

「圭吾のあれ、気にしたんだろ」

「……多分……な」

「音々にしては珍しいな」

「だな……。あたしにもなんとかせつぱりだよ……」

「音々は意外と鈍いな」

「は……？あたし体育これまでずっと5A評価だけど……？」

「あ。そういうことじゃない。」

「え？じやあなたにセ」

「保健室、着いた」

「あ……」

別にしんどいわけじゃない。

だけど、精神的に、といふのかなと言つのか
しんどいのかもしれない。

保健室に入ると、案の定保健の先生はいない。

保健の先生は多分教頭先生とおしゃべりでもしているのだろう。

「病人は横になるよつこ」

そうりょーに言われてあたしはベットに横になる。

りょーは保健の先生愛用の椅子をひりひりと転がしてきて
あたしのベットの隣に座る。

「さつきの鈍いって意味、教えてよ」

「気になつてた？」

「あたりまえだろ。」

「ん……まあ、いい。でも、コレ聞いて

圭吾と音々がギクシャクするのを俺は見てられない。
だからいつも通りな。」

「……わかった。」

あたしはこれから何を言われる?
圭吾とギクシャクしてしまった事つて…
何…?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0175ba/>

いつわって？カレカノ！

2012年1月10日23時47分発行